

6. 漱石は精神病だった？ ①

精神病の診断

精神科医で作家の加賀乙彦は、『夏目漱石』（群像日本の作家Ⅰ、小学館）の中で、《私が自説を発表したとき、さる高名な漱石研究家から、大漱石を狂人あつかいするとは何ごとかと、激しい批難の手紙が来た》としながら、《つい最近（1990年4月）、NHKの教育テレビで、私は『夏目漱石』という三十分四回の番組に出演し、そのなかで、漱石の精神変調について話した。すると、長男の夏目純一氏から電話があり「父の異常をすばりと言ってくれて嬉しかった」と伝えられた。弟子たちと鏡子夫人や子供たちとの間に、病気をめぐった確執があった点もはっきりと証言しておられた》と記しています。

長女筆子の娘にあたる松岡陽子マックレインも、『漱石夫妻 愛のかたち』（朝日新書）で母の話として、家族は《病気が起こる前は顔が真っ赤に火照ったのですぐ分った》が、そのような「お父様の病気」の時には、《みなでできるだけ音を立てないように務めた》と記し、《「お父様の病気」が起きた時の漱石自身も母たち家族も、まことに気の毒だったと心から同情する》と続けています。

漱石が精神病患者であるとするならば、いったいどのような診断がくだされているのでしょうか。

加賀は「うつ病」と「精神分裂病（1991年出版当時）」（統合失調症）の二説の診断がある、と記し、自身はうつ病説をとっています。

加賀の後輩にあたり、同じ東京大学医学部卒業で、同様に松沢病院で働いた経歴がある精神科医の岩波明は、『文豪はみんな、うつ』（幻冬舎新書）という本で、漱石をはじめとする、明治から昭和初期にかけて活躍した文豪とよばれる十人の作家をとりあげ、漱石・有島武雄・芥川龍之介・太宰治がうつ病、宮沢賢治が躁うつ病、島田清次郎・中原中也が統合失調症、谷崎潤一郎が不安神経症（パニック障害）であったとしています。統合失調症とされた島田清次郎は私と同郷の石川県出身であり、中原中也は私が出た幼稚園の先輩にあたります。岩波は漱石を「うつ病」の中でも、とくに「妄想を伴う精神病性うつ病（妄想性うつ病）」と診断しています。

加賀も岩波も漱石について、うつ病と診断しているわけですが、漱石にくだされた精神病の病名は、「うつ病」だけではありません。「混合精神病」「精神分裂病（統合失調症）圏の病気」「病状は分裂病だが、周期的なところは躁うつ病」「非定型の躁うつ病」……と、じつに多種多様。いったいどれが正しいのか、あるいは全部正しくないのか判然としません。そもそも、誰も漱石を直接診察していないのです。

ところが、精神科医としてひとりだけ漱石を診察した人がいます。呉秀三（1865～1932年）と言う、クレペリンに師事して学んだ、日本の精神医学の父と呼ばれる人物です。東京帝国大学医科大学精神科教授の呉は、1901年に府立巢鴨病院院長を兼任するようになり、病院改革に着手し始めていました（巢鴨病院・松沢病院は1940年代まで、東大医学部教授が院長を兼任することになっていました）。

1903年、イギリスから帰国した漱石は、熊本に戻るつもりがなく、第五高等学校退職願に添付する診断書について、《診断書に神経衰弱と書いて欲しい。ロンドンで会ったことのある呉秀三に頼んで欲しい（1903年3月9日付書

簡)》と、菅虎雄に依頼しています。当時、高校教師であっても、官吏であるからには、「一身上の都合」で公職を辞することができなかつたのです。学生時代からの知人で、留学中に会ったことがあり、精神科医をしている呉は適任だったのでしょう。この診断書を書くにあたって、呉が実際に漱石を診察したかどうか、定かではありません。

ところが、その年、漱石が望んだわけではないのに、ほんとうに呉の診察を受ける機会が訪れてしまいました。7月頃、漱石のあまりにひどい暴力に危機感を感じた鏡子が子どもを連れて実家へ帰った時。当時、妊娠中の鏡子は尼子四郎医師の診察を受けていましたが、鏡子の依頼を受けて尼子は呉に話を持ちかけ、漱石もそれに応じて診察を受けたのです。

呉がくだした病名は、《追跡狂という精神病の一種》。呉は鏡子に、漱石が妻子をどなりつけたり、暴力を振るうのはそのためで、《ああいう病気は一生なおり切るといことがないものだ。なおったと思うのは実は一時沈静しているばかりで、後でまたきまって出て来る》と、病気について説明したと言います。鏡子は《病気なら病気ときまって見れば、その覚悟で安心して行ける》と語ったという話も残されています。

それにしても、「追跡狂という精神病の一種」という病気はどんなものなのか。そもそも精神病の病名として確立したものではないので、呉がどのように判断したか、よくわかりません。ただ、「追跡狂」という言葉から、「つねに何かに追いかけている」「見られている」といった強迫観念、追跡妄想を想起させます。この症状は統合失調症にもみられると言われています。鏡子は『漱石の思い出』で、当時を振り返って、《このころは何かに追跡でもされてる気持ちなのかそれとも脅かされるのか、妙にあたまが興奮状態になっていて、夜中によくねむれないらしいのです》と記しています。

とにかくあれほど「頭の良い」人が、突然「頭の悪い人」に豹変する。鏡子はまさに子どもにでもするように、千駄木にいる時には妻恋稻荷(湯島)へ出向いて、「虫封じ」の祈祷を受けたり、お札をもらったりしており、早稲田へ引越してからは、虫封じの祈祷で有名な穴八幡宮に出向き、虫封じのお札に釘を打ち込んで、漱石の「あたまが悪い」のを治そうとしたとか。

漱石は自分自身を「神経衰弱」と捉えていたようです。五高の退職願に自身の診断書の病名を「神経衰弱」と書いてくれるよう依頼しており、学習院における講演(1914年)でも精神的変調を「神経衰弱」として回想しています。

ウィキペディアによると、神経衰弱は1880年にアメリカの医師ベアードが命名した精神疾患の一種で、症状として精神的努力の後に極度の疲労が持続する、あるいは身体的な衰弱や消耗についての持続的な症状が出ることで、具体的には、めまい、睡眠障害、いらいら感、消化不良などの症状が表れてくる。当時のアメリカでは都市化や工業化が進行し、労働者の間でこのような症状が多発したことから、研究も進み、病名もつけられた、と説明されています。

その後、近代化社会がもたらす文明の病・過労の病として病名が輸入され、日本でも有名になりました。いわゆる「現代病」ですから、新しいもの好きの漱石が、自身を「神経衰弱」と見なしているのも、うなづけます。漱石の症状から、「神経衰弱」という診立ては、かなり当たっているように思われます。

なお、「神経衰弱」という言葉は今でも一般的に使用されますが、精神疾患の病名としては使用されず、「神経症」と呼ばれることが多いそうです。

小宮豊隆の見解

精神科の専門医から本人に至るまで、漱石を精神病患者として捉えているのですから、「漱石は精神病だった？」という問いかけに、「そうです」という答えで落ち着きそうです。けれども私は漱石の弟子の一人で、漱石研究者でもある小宮豊隆の見解に注目しています。

小宮は『夏目漱石』（1938年）で、つぎのように述べています。

鏡子が漱石を精神病患者であると信じていたことには、疑いが無い。しかし尼子四郎や呉秀三の診断にもかかわらず、こういうのを精神病患者として見做していいかどうかについて、私は深刻な疑いを持っている。元来一人の人間が精神病であるかないかを決定することは、困難であるには違いない。それだから今日の精神病医は、数回にわたり、もしくは数時間にわたって、患者と対話し、あらゆる方面から、手間をかけて、その患者の精神機能を観測し、診断の材料を蒐集しようと努めている。然るに尼子四郎や呉秀三は、恐らく漱石の身体を一回、たかだか二回くらい、それも外のことに託して、そこそこにしか見ていない。

としたうえで、『理由なしに女房を憎み、理由なしに子供をいじめ、理由なしに下女を追い出し、理由なしにそこいらの人間に怒鳴り散らすとすれば、これは、尼子四郎や呉秀三を俟つまでもなく、まさに気違いの沙汰である』が、漱石には理由があり、さまざまな言動が『仮令それは子供らしいという非難は免がれ得ないにしても、決して非常識でも、精神病でもないはずである』と結論づけているのです。

小宮が漱石「精神病説」をとらないのは、漱石の異常な行動を体験しなかったからではありません。漱石の行動は鏡子からも聞かされており、『夏目漱石』の中でもそれを紹介しています。精神科医から「精神病」と告げられ、それを信じている鏡子を批判していません。小宮は、漱石が異常な行動をとった時、なぜそうなったか、一般的に理解できる。つまり、「異常」にみえて、「異常ではない」。一般的に理解できない行動に出るならば、それは「精神病」と言えるが、理解できるのだから、「精神病」ではない。これが小宮の見解です。

それでは、小宮は漱石の異常な行動をどのようにみていたのか。『夏目漱石』で小宮は、

漱石は、道理に戻る一切のものを、機微に看破する、鋭敏な感覚を持っていた。同時に漱石の想像力は豊富であり、漱石の頭脳は迅速に活動した。誰にも気がつかないほどの小さな汚染でも、漱石の眼には大きなものとして映り、のみならずその中にあらゆる悪の芽を含むものとして、忽ちのうちに顕著な花が咲き出る。想像力を持たず、神経も遅鈍で、反省することを知らない人間が、自分にはそんなことをした覚えはないと言い張っている間に、漱石は、そのために傷つけられ、そのために悩み、そのために狂って、停止することを知らない状態に置かれることも、十分可能なのである。（略）とうとうほんとの精神病患者にされてしまった。

と記しています。漱石と漱石の文学を理解するうえで、きわめて重要な指摘であると私は思います。

朝日新聞「入社の際」も、漱石の異常な行動、あるいはその引き金となる鋭敏

な感覚が顔をのぞかせています。漱石は《大学で講義をするときは、いつでも犬が吠えて不愉快であった。余の講義のまずかったのも半分は此犬の為である》と記し、大学で一番心持ちの善かったのは図書館の閲覧室で新着の雑誌などを見る時としながら、《余が閲覧室へ這入ると隣室に居る館員が、無暗に大きな声で話をする、笑う、ふざける。清興を妨げる事は莫大であった》として、学長に抗議した（1903年）ことも述べています。

自分の講義がまずかったのは、犬や図書館や学長のせいで、自分の学力が足りなかったからではない、《不平があるなら其方へ持って行って貰いたい》と言うのですから、責任転嫁もはなはだしい感じがします。もちろん、漱石が本気でそう思っていたかわかりません。漱石流の皮肉かもしれませんが。けれども、漱石が音に対して敏感だったことは確かなようで、法蔵院の尼の声が気になったと言う話が生まれたり、下女の声もかなり気にしていたようです。一見、「被害妄想」の感もしますが、漱石にとっては「妄想」ではなく、ほんとうに「被害」と感じ取っていた。そのくらい鋭敏な感覚をもっていたのでしょう。

それはまさに脳の性能、器質に属することで、小宮は漱石の異常な行動を、精神病と言う病理の側面からではなく、脳の性能、器質的な面から捉えようとしています。これはきわめて重要な指摘であると、私は思います。そして、小宮は器質的な側面をさらに、

漱石は子供の時分から、自然なこと、正直なこと、正しいことを、何よりも愛するように、生みつけられて来ているのである。お世辞やお体裁は嫌いであった。自分のことは棚に上げて、自分だけ涼しい顔をしていることが嫌いであった。自分一人がいい児になることを恥すべきことと考えた。その代り人が間違ったことをしていれば、一々それを訂正しなければ気が済まなかった。それだけに漱石はこの「世の中」に触れて、事ごとに悩まされ、傷つけられ、安き心は得られなかったに違いない。（「変物」）。

そのように真面目で純粹で一向きな漱石ですから、《世の中を見れば見るほど、世の中のことを考えれば考えるほど、世の中が不愉快になって来るのは、当然であった》（「厭世主義」）と言うのも、何となくわかるような気がします。漱石の苦悩の源が明確に示されているように思われます。そして、80年前、小宮がすでに今日の「生きづらさを抱えた人びと」を的確に把握していたことは、私にとって驚きです。

【参考文献】

小宮豊隆：『夏目漱石』（岩波文庫）